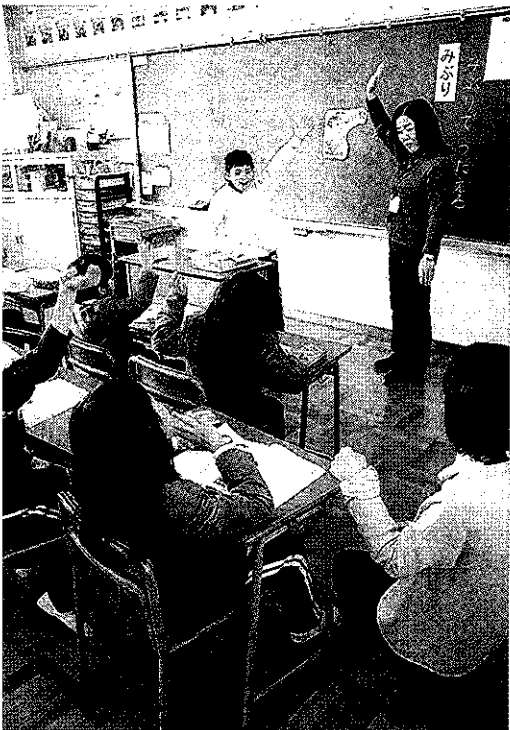


レベル別早くも成果

県内で特に外国人児童、生徒が多い鈴鹿市の小中学校では、子どもの日本語能力を詳しく測定する「JSLバンドスケール」という試みを取り入れている。到達度に合わせたきめ細かな指導ができるようにするのが狙いで、日本の公立学校へ通う外国籍の子どもが増える中で注目されている。
(木下大資)

鈴鹿の外国籍児童ら日本語教育



外国人児童に日本語を教える牧田小学校の特別教室「いきいき」。個々の能力に応じた指導を工夫している＝鈴鹿市で

鈴鹿市教委と、JSL いけなくなる子もいた。た。日常会話ができていバンドスケールを開発し バンドスケールは、取るようでも実は読み書きた早稲田大学院日本語 担任らが「聞く」「話 が不十分な傾向があり、教育研究科が協定を結 担任らが「聞く」「話 本来必要な取り出しを受び、本年度から始めた。 す」「読む」「書く」の けていない子が二割ほど市内の多くの学校で、 能力別に一人一人の日本 いたことが分かった。日本語が十分でない外国 語をチェックし、七七八 分析結果を受け、各校籍の子どもは在籍クラス 段階のレベルで把握す では取り出しの時間を組とは別に、「取り出し」 る。昨年の一学期に初め み替え、レベルに合わせと呼ばれる特別授業を受 て市内の外国籍児童、生 た教材作りも始めた。同 徒全員を対象に測定した 研究科出身で牧田小学校生活に困らない程度の日 ところ、「書く」能力で 指導、研究に当たる中本語が話せると判断すれ は取り出しによる日本語 川智子さん(こ)は「クラ ばクラスに戻していた 指導が必要な「レベル4」 ス担任の先生も、子どもが、教科の勉強について 以下の子が七割に上っ の足りない部分を意識し

教師 弱点把握 児童 学習に意欲

て見るようになった。子どもにかかわるすべての先生が補い合える関係ができ始めた」と効果を語る。

同小では二学期末にも測定を実施し、前回に比べて読み書きにもかなりの伸びが見られた。能力に合った勉強ができるので子どもの意欲がわき、学校生活が充実して欠席も減ったという。

市教委によると、今後小学校に入学する外国人児童は急増する見通しで、その多くは日本生まれという。鈴木英文・人權教育課主幹は「母国語の能力も不十分なことが多く、日本語をきちんと伸ばしてやるのが重要だ」と指摘する。

JSLバンドスケール 「第二言語としての日本語」(Japanese as a Second Language)を学ぶ子どもの能力の測定基準。「ジェスチャーを頼りにする」「易しく言い換えれば理解できる」といった項目のリストをもとに、子どもの様子を教師が観察し、言語習得の段階を判定する。オーストラリアの移民向けの英語教育を参考に開発された。

視線 最近の経済悪化を受け、鈴鹿市教委は毎日、小中学校に通う外国人児童・生徒数の把握に努めている。家族で帰国した子もいる一方で、授業料が高いブラジル人学校から編入する子も増えており、在籍数は六百三十人を超えた。

外国籍の子どもの日本語能力にはらつきがある上、親の仕事の都合による出入りも激しい。こうしたハンディキャップを抱えた子どもは今後も増える可能性があり、バンドスケールを

